

主 題：「主にある家庭生活③：親と子」

聖書箇所：コロサイ人への手紙3章20-21節

テーマ：神様から親と子に与えられた責任とは何か？

今朝、久しぶりに皆さんと見ていくのはコロサイ人への手紙3章のみことばです。コロサイを最後に学んでから、いつの間にかもう約二ヶ月が過ぎてしまいました。私たちは今タイトルにもあるように、「主にある家庭生活について」特にコロサイ3：18から考えていました。現代の社会、家族や結婚のかたちが次第にねじれていって夫婦生活や子育てなどいろんな問題が取りざさされるようになっている中、私たちは改めて、みことばが教えている家族の姿を学んでいました。その内容を続けて見ていくにあたって、最初に皆さんには二つのことを覚えておいてくださいとお願いしましたが、何だったか覚えているでしょうか？

一つ目をお願いしたこと、それは、「私たちは最も親しい関係にあっても主の栄光を現そうとするのだ」ということでした。言うまでもなくみことばは、どんなときも私たちが主の栄光を現す者として生きていくことを求めています。もちろんそれはひとりの時もそうですし、教会にあって兄弟姉妹とともにいる時もそうですが、特にありのままの自分の姿が現れる親しい家族の前で、夫婦や親子関係にあっても同じように主の栄光を現していくということが大切でした。「果たして私たち自身はどんなときも変わらずに主の栄光を現す者として成長し続けているのかどうかということ、このみことばを通して考えてください。」と言ったのです。

またもう一つ覚えておいてくださいと言ったこと、それは、「私たちはデザイナーの意図に従うことが大切だ」ということでした。デザイナーの意図に従うのです。言い換えれば、今見ているような家庭のことであれ、結婚や子育てのことであれ、私たちはそのすべてのことを最初に創造されたお方、創造主なる神様の持っておられた御計画に従うということが大切でした。悲しいことに私たちが今周りを見渡せば、デザイナーが最初に意図したものとは全く異なるものであふれかえています。そしてその結果、さまざまな問題がおのずと生じて、家庭や人間関係に難しさが現れるようになっているのです。だからこそ私たちの責任は、創造主が意図されたものに再び目を向けて、それに従い続けていくということでした。それが、私たちにとっての喜びであり最善だというわけです。ですからこれからみことばを見ていく中で、また改めて自分自身に問い続けてみてください。いったい神様は最初からどんな意図を持ってこの関係を造られたのだろうか。そしてその意図に果たして私は従っているのだろうか。

もうすでに私たちは夫婦の関係を見ました。きょうこれから私たちが見ていくのは、親子の関係です。神様は子どもに対しても、また親に対しても大切な責任を与えておられました。今から見ていきますが、今まさに子育てに励んでいたり、今まだ子どもである皆さん。そんな皆さんにとってはまさに欠かすことのできない創造主なる神様からの知恵と訓戒がこの箇所には明らかにされています。子どもとして、神様の前に喜ばれる者として生きていくというのはどういうことなのか、また子育てをするにあたって、神様はどんなことを教えておられるのかを見て取ることができるのです。ですからぜひ自分のこととして考えてみてください。またもちろんこの中にはすでに子育てを終えられたという方もおられるでしょう。そんな皆さんもぜひ自分自身の歩みを、みことばと照らし合わせて考えてみてください。そしてそれと同時に、もし皆さんのもとに子どもを持つ兄弟姉妹がやって来たとしたら、どのようにしてみことばから助けることができるのかを考えながら、神様の教えに耳を傾けてみてください。ではそのことを念頭において早速みことばを見てみましょう。

コロサイ3：20-21

「:20 子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。:21 父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。」

### ○親子間におけるそれぞれの責任：

では、親子間における子どもの責任から一緒に考えてみますが、その前にこれからの内容をより深く理解するため、歴史的な背景を少し頭の片隅に入れておいてください。パウロがかつてこの手紙を記した当時、親と子の関係というのは、今とは大きく異なるものでした。ウィリアム・バークレーという先生もローマ社会に存在していた子どもを取り囲む厳しい環境をいくつかこのように挙げていました。

「(1) ローマには”パトリア パテスタス”(父親の力)と呼ばれる法律が存在しました。この法律の下では、ローマの父親は家族に対して絶対的な権力を有していました。家族を奴隷として売ることができ、鎖に繋がれたまま畑で働かせることができ、好きなように罰することができ、死刑を宣告することさえできました。さらに、この権力は父親が生きている限り、子どもの一生にわたって続きました。たとえ成人したとしても、市の役人であったとしても、国が相応しい栄誉を与えたとしても、子どもは父親の絶対的な権力の下に置かれたのです。(2) 子どもをさらすという習慣も存在しました。子どもが生まれると父親の足元に置かれました。父親が身をかがめて持ち上げれば、それはその子を認め、育てる意志があることを意味しました。もし父親が背を向けて立ち去れば、その子を拒否したことになり、文字通り捨てられる可能性があったのです。…また、望まれない子どもはローマの広場に置き去りにされるという習慣も存在しました。彼らはそこで拾われた者の所有物となりました。夜になると、奴隷として売ったり、ローマの売春宿に仕入れるために、彼らを世話する人々によって拾い集められたりしたのです。」(ウィリアム・バークレー) どうでしょう。読んだだけでもあまりにもひどい環境だと思いませんか？今からは考えられないことかもしれませんが、当時の子どもたちは、まさに親の所有物でした。雑に軽く扱われていたのです。

パウロはそのような環境をよくわかっていました。その中で彼は、親に対してだけではなく、社会の中で忘れられているような子どもたちに向けてもことばを残したのです。「子どもたちよ。」と。一つ確実に言えることは、何より神様は子どもたちのことを愛して彼らを見捨てることはなかった、ということです。覚えていますか？イエス様も同じでした。子どもたちを自分のもとに連れて来ようとした人々を叱った弟子たちに対して、はっきりと言われていました。マルコ10:14-16「:14 イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。:15 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」:16 そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。」と。確かに当時の社会は子どもをまるで物のように扱っていました。でも、あわれみ深い神様は子どもを愛しておられました。そしてそんな神様が子どもたちにとっての喜びとなるために、子どもたちにとっての最善のために、彼らに務めを、彼らに責任を与えておられたのです。20節でこのように言われていました。「子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。」

#### 1. 子どもの責任：両親に従うこと 20節

子どもの責任は、「両親に従うこと」でした。親の皆さんは「まさにその通り！」子どもは「ええー」となっているかもしれません。でもこの世界を創造された神様は、「親に従う」という大切な務めを子どもたちに対して与えられていたのです。ちなみにここで言われていた子どもたちということばは、特定の年齢に限定しない、幅広く親の保護下にある者たちのことを指していました。要するに幼い者から若者に至るまで、家で親の助けや世話に頼っている子どもに、神様は「自分自身の親に従いなさい」と命じられておられたのです。それがすべてのデザイナーであられる創造主のご計画でした。それこそが何よりも子どもたちにとって喜びをもたらす神様からの責任だったのです。

ただ立ち止まって少し考えてみてください。あまりにもシンプルな命令でしたが、この「親に従う」というのは、実際にどんな姿を言うのでしょうか？もちろん教会におられる皆さんの子どもの多くは、昔から「親に従いなさい」と言われ続けてきているのですが、ここで「従う」というのは何を意味しているのでしょうか？「従う」というのは、自分のしたいことややりたいことを言われたときだけその話を聞くことを言っているのでしょうか？自分がしたくないことを言われたとき、嫌々ながらもただやれば問題ないのでしょうか？鍵になるのはここで使われていた「従いなさい」ということばの意味でした。

▶「従いなさい」（「下」「フポ」＋「聞く」「アクオ」）

この「従う」ということばは、もともと二つのことば「下」を意味する“フポ”と「聞く」を意味する“アクオ”がくっついてできたことばでした。そしてここから「だれかのことばや指示に従う」とか「相手の言うことに従順になる」という意味で用いられたりしました。それがこのことばの持っていた意味でした。「下」と「聞く」がくっついてできたことばだと聞けば、皆さんならおのずとその様子が想像できたりするかもしれません。たまにモールに買い物に行くと、走り回っている子どもの腕をつかまえて、親が「お父さん、お母さんの言うことを聞きなさい。」と言っているようなすごい場面に出くわすことがあります。確かに子どもはそのとき両親のことばを、耳にはしています。でも、つかまれているその手を今にも振り切って走り出そうとしていたりするのです。果たしてこれはだれかの「下」で「聞く」というような態度なのでしょうか？そうではないのです。それと同じように、ここで「両親に従いなさい」と命じられているとき、これはただ単に子どもがそのことばを聞くことだけを意味しているわけではありませんでした。両親の下に自分を置いて、親のことばを素直に聞き入れて従うことが求められていたのです。ケント・ヒューズという先生もこんなことばを残していました。「従順には意識的に耳を傾けることが必要です。本当に聞かなければ、本当に従うことはできません。だから親はいつも『言うことを聞きなさい』と言うのです。理解して、実践するつもりで耳を傾けること…この多くは態度の問題なのです。私たちは悪さをした少年のようになるべきではありません。先生に角に座っていなさいと言われた彼は、嫌々ながらそれに従い、その間ずっと自分に聞かせていました。『外側では座っているけど、内側では立っているんだ！』と。」（ケント・ヒューズ）皆さん、様子が思い浮かびませんか？外側では座っていますが、内側では立っていますと。これは聞いていることにはならないということです。大切なのは外側だけではありません。内側も同じでした。パウロはこれと同じようなことをエペソ6章でも語っています。「子どもたちよ。」と語りかけて、そして「両親に従いなさい」と。これに加えてこの箇所では「両親を敬う」ということが言われていました。エペソ6：1-2「：1 子どもたちよ。主にあつて両親に従いなさい。これは正しいことだからです。：2 「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。…」要するに「子どもが親に従う」ということは、ただ見せかけだけの行いをするのが求められていたわけではありませんでした。それにはいつも心の態度が伴っていることが欠かせなかったのです。これは後でよく出てくるので覚えていてください。神様が子どもに求めておられたことは、見せかけだけの行いをするのではなく、心の態度を伴っていること、それが求められていたのです。しかもこのコロサイ3：20を見ると、パウロは両親のどの部分に従いなさいと言っていました？両親の言うことの一部に従いなさいと言っていました？そうではなく20節は「子どもたちよ。すべてのことについて両親に従いなさい。」と言われていました。「すべてのことについて」とは文字通り、すべてのことについてでした。もちろん両親が神様に逆らって罪を犯すようにと言う場合は別です。でもそうでないなら、あらゆることに関して子どもは親に従うことを神様から求められていた、というわけです。皆さんも経験がありますし、私自身もよくありますが、もしかしたらあるときは親が求めていることと、自分の考えや思いが違うということもあつたりするでしょう。部屋の掃除をしなさいと言われたけど、今はしたくない、もう少しだけ私のやりたいことをさせて！その後やるから。…といったこともあるかもしれませんし、また親が命じていることが自分にとって不公平に思えたり、理

解できないこともあるでしょう。なんで私の友達は普通にこんなことをしているのに、どうして私はしてはいけないの？例えば、なんで私だけがこんなふうに教会に行かないといけないの？など、子どもはいろんな理由を持ってきます。従わないことを正当化しようとする理由など挙げればきりがないほど私も喋ってきましたし、子どもはみんなその理由を持っているのです。でもみことばが教えてきたことは、たとえどんな場合であったとしても、子どもは親にいつもその場ですぐ従順に従う、ということが求められていました。自分のしたいことやりたいことだけ、ではありません。心の中で不平不満を呟きながら嫌々するのもありません。自分から進んで喜んで親の命令のすべてに従っていくということ、それが、ほかのだれでもない神様から求められていたことだというわけです。

これを聞いてこんな思いが頭の中に浮かんできたりするでしょう？今まさに子どもである皆さんも、子どもを経験したことのある皆さんも、いやいやこんな歩みなど私にはできそうもありません。すべてのことにおいて親に素直に従っていくことは、とても難しいことです。…と。でも同時に少し考えてみてください。最初に私たちは当時の子どもたちが置かれていた状況を見ました。いま一度思い出してみてください。果たしてあの子どもたちにとって、親に従うというのは容易なことだったのでしょうか？外側だけでなく心から親を敬いながらいつも従順であり続けるということは、彼らにとって何の困難も伴わないことだったのでしょうか？間違いなく大変だったと思いませんか？彼らの心をざわつかせたり、不安や怒りにあふれさせる要素はもうたくさんあふれていたのです。だから子どもたちにとって命令だけが必要なのではなく、励ましも必要でした。だからパウロはここでことばを終えていなかったのです。20節の終わりにパウロはこう続けていました。「両親に従いなさい」その後「それは主に喜ばれることだからです。」と。いったいどうして子どもはすべてのことにおいて両親に従おうとするのでしょうか？「それは主に喜ばれることだからです。」と。

両親が喜んでくれるから、もちろんそれも大きいでしょう。でもパウロはそうは言いませんでした。それは主が喜んでくださることなのだ。従うのが難しく思える状況もたくさんあるでしょう。大変さを覚えるようなときもあるでしょう。でも覚えていてください。それでもなお喜んで従っていくなら、ほかのだれでもない神様がいつもご覧になっていて、それを大いに喜んでくださるのだということです。そして逆を言えば、もし従わないなら、それはただ両親を悲しませることになるだけではありません。親に従わないというのは、親に逆らっていることだけではありません。結果的には、それは神様を悲しませ、神様に逆らっていることと同じになるのです。だからこそ子どもたちにとって大切なこと、それは、何よりもまずイエス・キリストを自分の救い主として信じて従っていくことでした。心から神様ことを愛し、そしてこの方が愛しておられること、この方が喜んでくださること——「両親に従っていく」ということを追い求めていくことが大切でした。それが子どもたちに与えられていた務めだったのです。幼い者から若者に至るまで、子どもたちに神様が定めておられた、巡りめぐって神様ご自身に最高の喜びをもたらすことに繋がるものとして、神様が「両親に従っていきなさい」という計画を立てておられたのです。これが家庭においての子どもへの責任でした。20節のことばがシンプルのようにみことばが教えていることは明白でした。子どもは神様を喜ばせるために、どんなときもただふるまいだけではなくて、心から両親に従うことが求められていました。それが子どもに欠かせなかったことだったのです。

ただ、当然完璧な子どもなどひとりもいません。どんなに自分の子が可愛くてそれを認めたくなかったとしても、どんな子どももすべて例外なく罪人として生まれてくる以上、罪を犯して親や神様に逆らうのです。だからこそ親には、そんな子どもを導いていくという大きな責任が与えられていました。それが親の責任でした。神様から皆さんに託されたその子どもが、自分を喜ばせるためではありません。社会の中で良い者になっていくためでもありません。神様から与えられた責任を果たすことができるようにと教えてあげて、養い育てていくということが求められるのです。神様から託された皆さんの子ども

もが、今私たちが見たように、すべてのことについて両親に心から従っていくことができるようにと、親はその助けをし、そのことにおいて正しいことを教え、間違っていることがあれば戒めを与え、そのようにして導いていこうとするのです。

そしてその子育てにおいて今私たちが見たこの21節の教えを親が覚えているということは、非常に重要なことでした。というのも、少し考えてみてください。例えばもしだれかが皆さんのところにやって来て皆さんに向かって「あなたが持っている子育ての目標は何ですか？」と尋ねたら、何て答えます？ある人は「神様の栄光を現す者に成長して行ってほしいです。」と言うかもしれませんし、ある人は「みことばに根ざした者になって行ってほしい」とか「神様のことを知って愛を实践する者になって行ってほしい」とかいろんなことを言うかもしれません。どれもすばらしい願いです。ではその質問に続けて、もしこう聞かれたらどう答えます？「その目標のために何に気をつけて子育てをしていますか？」と。すばらしい目標や願いを持つことはもちろん大切です。けれどもその目標のために何に気をつけて子育てをしていますかと聞かれれば、何て答えるでしょう？もちろんこれもいろんな答えが出てくるかもしれません。でも一つ考えてみたいことがあります。果たして皆さんは子どもが正しいふるまいをするようにと気をつけて、行いの部分だけを指導しようとしているのでしょうか？それとも、子どもの心の姿勢のことを気をつけて、心も含めて訓練しようとしているのでしょうか？

この違いというのは非常に重要なことでした。この点について親と子のコミュニケーションという本を記したテッド・トリップという先生が次のことばをその著書の中で残していました。考えさせられるので皆さんもよく見てみてください。「子どもの言うこと、行うことは、子どもの心の中にあるものを反映しているのです。ルカの福音書6章45節は、このことを確証しています。『良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。』親というものは、つい行いに目が向いてしまいます。あなたが子どもをしつける目標が行いを変えることにあるとしたら、そうになってしまう理由はよくわかります。正すべきはその子の行いにあると思ってしまうのです。良くない行いは、親をいらいらさせるため、行いそのものに注目してしまうのです。あなたの注意は行いに集中します。そして、子どもの良くない行いを、親の目から見て良いものへと変えることで、子どもを正したと思うのです。『何が問題なのでしょう』とあなたは言うかもしれません。問題なのは、あなたの子どもの必要は、その悪い行いよりももっと深いところにあるということです。子どもの行いは、何も原因のないところから湧き上がってくるものではありません。その子の行いは、その子の心の反映なのです。あなたが子どもを本当に助けたいなら、なぜそのような行いをするのか、つまりその子の心の状態について考え、心配しなければなりません。心を変えずに行いだけを変えることは、感心なことではありません。それどころかむしろ非難すべきことです。それこそが、イエスがパリサイ人をご覧になって偽善者だと非難したことではないでしょうか。…しかし、これこそ、私たちが子育てをする上でよくやってしまうことです。子どもの行いを変えることには熱心であるにもかかわらず、その行いを生み出す心には目をとめないのです。…しつけや訓練は、その子の心の姿勢に対して行わなければなりません。このことを理解するなら、しつけは素晴らしいものになります。しつけは、もはや行いではなくて心を問題とします。ただ行いを変えるのではなく、もっと深い部分を正すことになるのです。心の中で何が起きているかということが、子どもをしかる上での焦点となります。あなたの感心は、子どもの罪を明らかにし、罪がいかに心を墮落させるかを子どもに理解させることとなります。それはキリストの十字架へと繋がっていきます。救い主が必要であることを強調するものとなります。そして、私たちの心を変え、罪の束縛から私たちを解放してくださる神の栄光を示す機会となるのです。」(テッド・トリップ)言われていたことはある意味シンプルかもしれませんが。でも皆さん、私たちにとって、どこに焦点を置いているのか、ということは非常に大切なことでした。だから覚えておかないといけないのです。私たちがきょう見てきたように、神様が子ども

たちに求めていたことは、ただふるまいだけを、行儀よくしなさいということではありませんでした。ふるまいだけではなく、心から彼らが神様のことばに喜んで従っていくということが大切だったのです。だからこそ子育てにおいて、単なる表面上の変化を求めるではありません。子どもが本当に神様を喜ばせる者として成長して欲しいと願うのなら、自分自身の子どもが、教会学校に通っているその子どもが、本当に神様が喜ばれることを願ってみことばに従っていく者へと成長していくことを願うのなら、そのふるまいと心のどちらをも教えてあげることが必要になるのです。どんなときもみことばから神様のすごさを、そして神様の基準を教えて、間違いを犯したなら何をしたかだけではなく、なぜ罪を犯したのかを一緒に考えてあげて、そして唯一その心を変えることのできるお方に、神様の恵みを求めようと、導いてあげるので。それが時に懲らしめを伴うことであつたとしても、愛のゆえにそれを喜んでなしてあげるといふわけです。みことばもこのように宣べていました。箴言22：15に「愚かさは子どもの心につながれている。懲らしめの杖がこれを断ち切る。」親はそんな特別な務めを抱えていました。子どもが神様に喜ばれる者として成長していくその本当に必要な部分を満たすために、親はそれを導いてあげるといふ大きな責任を神様から託されていたのです。

## 2. 親の責任：子どもをおこらせないこと 21節

でもこれがすべてではありませんでした。パウロはさらに具体的な親の責任を続きの部分で挙げていたのです。戻ってコロサイ3：21を改めて見るとこのように記されていました。「父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。」親子間における親の責任は、「子どもをおこらせない」ということでした。気づかれたかと思いますが、ここでパウロは「父たちよ。」と口にしていました。勘違いしてほしくないのですが、これは別に母親のことを除こうとしていたのではありません。実際これと全く同じことばが別の箇所では「両親」と訳されることもありました。ヘブル11：23では「信仰によって、モーセは生まれてから、両親によって三か月の間隠されていました。…」というふうに書かれています。ここで出てきた「両親によって」というのが、コロサイ3：21と同じことばでした。ですからここでの責任というのは、父親だけに課せられていたものではありませんでした。もちろん家庭を導いていくというだれよりも大きな務めを担っているのは、父親でした。だからこそ、パウロはここで「父たちよ。」と、そのことを強調する意味もあつたのです。でも同時に、母親にもここでの責任は当てはまっていました。その責任がここで命じられていたのです。そしてその命令は、「子どもをおこらせない」ということでした。でもこれも間違つたいろんな変な考えが入り込んでいたりします。ここで言われている「おこらせない」とはいったいどういうことでしょうか？果たしてこれは親が何か子どもの機嫌や様子をいつもうかがって、恐る恐る、怒らせないように怒らせないようにすることを言っているのでしょうか？もちろんそうではありませんでした。

ここで使われていた「おこらせる」ということばのイメージには「燃え立たせる」というものがありました。想像してみてください。皆さんもキャンプとかバーベキューとかで火を起こしたことがあると思いますが、その時は着火剤を使ったり、炭や薪などを組んで、そして酸素をじょうずに送り込みながら火をつけるのです。火がついても放っておくと次第に火は小さくなっていつそのまゝ消えてしまいそうになることもあります。消えてしまいそうになったときは、その火に近づいて息を吹きかけたりします。酸素を送り込んで小さなその火を刺激してあげて、さらに燃え上がるようにするのです。ここで言われている「おこらせる」というのも同じようなことでした。このことばは相手を刺激して、反応を引き起こすことを表しているのです。だからこそこのことばは、「だれかを挑発したり、刺激していらさせる」とか「辛い思いや苦い思いにさせる」ことを意味していたりしました。そんなことばを用いてパウロはここで警告していました。厳しく「父たちよ。子どもたちをおこらせてはいけません。」と。

でも、なぜ親が子どもをいらいらさせてはならないのでしょうか？いらだたせてはならないのでしょうか？その明白な理由がすぐ後に続いていました。21節には「子どもをおこらせてはいけません。彼らを気

落ちさせないためです。」と書いていました。これが理由でした。「彼らを気落ちさせないため」と。ここで「気落ちする」ということばには「やる気を失う」とか「意気消沈する」「落胆する」という意味が含まれていました。要するに、親が子どもを怒らせるとその結果どうなるか？子どもは落胆して、意気消沈して、やる気を失って、そして従っていくということに対する意欲や望みを失ってしまう、というわけです。ひとりの註解者もこのように述べていました。「親が愛情を持ってしつけをし、バランスを考えながら主の道を教えなければ、子どもから心を奪ってしまうことになるのです。」と。親子の関係においてパウロはその危険性があるということをよく分かっていました。でもある意味当然と言えるかもしれません。考えてみてください。この当時の父親はどんな存在でした？この当時の父親は子どもに対してあまりにも大きすぎる権力を持っていたのです。自分たちの思い通りに厳しく扱ったとしても、別にそれは当然のことでした。その状況の中で子どもたちが忠実に親に仕えようとして、神様のことばに喜んで従おうとしていこうとしているにもかかわらず、親がそれをいっさい認めず、親がそのことを喜びもせず、親がそのことを認めもせず、親がいつもそのことに対してあわれみを示すことなく接し続けていけば、子どもはどうなります？間違いなくその子どもたちは失意で諦めてしまうでしょう。どうしたらいいのかわからなくなって悲しみや憤りにあふれて、従うことへの意欲や熱意を失ってしまうでしょう。もちろん親に与えられた一つの責任は、みことばから見ても訓練することでした。でも愛を持ってそれをなさなければ、残念ながら神様から託されたその子どもたちが、喜んで神様からの責任を果たすことができなくなってしまうというわけです。皆さんここに問題が見えますか？本来であれば子どもたちが喜んで主に従っていくことができるように助けてあげるべきその親が、導いてあげるべきその親が、そんな彼らの心をへし折ってしまうことになるというわけです。だからみことばははっきりと言っていました。そんなことがあってはなりませんと。どんなしつけにおいても親たちは子どもをおこらせて、彼らを気落ちさせることがあってはいけませんと。

さて、ある人はここでこう思っているかもしれません。子どもをいらだたせてはならないということはいくつもありました。では、それは具体的にどんな態度なのでしょう？どんな行動なのでしょう？親のどんなふるまいが子どもの心をおこらせることにつながっているのでしょうか？と。もちろんこの点においていろんな態度、行動を挙げることはできます。でもせっかくなので聖書に登場している人物から見て取れるいくつかの具体例があるので最後にそれを見てみましょう。どんな態度がそれを引き起こすことにつながってしまうのかを三つ見ます。

## ●子どもをおこらせる態度

### a) 両親のえこひいき、比較すること

一つ目の態度は、「両親のえこひいき、もしくは両親が比較すること」です。子どもを別の子どもと比べて片方だけを愛するような間違っただけの態度は、子どもの内に大きな怒りを引き起こすことになるのです。そうなのか？と思うかもしれません。でも、まさにイサクとリベカがそうでした。イサクとリベカに関して創世紀25：28にこんなふうに記載されています。「イサクはエサウを愛していた。それは彼が獺の獲物を好んでいたからである。リベカはヤコブを愛していた。」残念ながら、二人の親は互いに自分自身の愛している子をひいきしてしまいました。そしてその結果、父親の祝福をめぐって争いが起こり、そして兄が弟を憎むようになったのです。創世紀27：41にもこう書いています。「エサウは、父がヤコブを祝福したあの祝福のことでヤコブを恨んだ。それでエサウは心の中で言った。「父の喪の日も近づいている。そのとき、弟ヤコブを殺してやろう。」」こうしてえこひいき、比較することは怒りを引き起こすことになりました。これは今も同じです。もし家族の中で親がひとりの子どもを愛してほかの子どもをないがしろにしていれば、またそれだけではありません。自分の子どもとほかの子どもを比べて、どうしてあの子のように…なぜあの子どものように…と口にしていけば、その子どもの心をへし折ることに繋がるというわけです。その危険性があるというのです。

## b) 両親の間の不一致

またそれだけではありません。えこひいきだけでなく、同じくこのイサクとリベカの例から見て取れる二つ目の態度は「両親の間の不一致」です。今見ても分かるように、イサクとリベカの二人の親にはえこひいきがありました。それに加えて、そこには一つの夫婦であるにもかかわらず、それぞれの考えが存在していました。例えばリベカが、夫のイサクがエサウを祝福するつもりでいると聞いた時、彼女は夫のところに行って相談しませんでした。夫のところに行って相談するのではなく、ヤコブにそのことを伝えて、自分の考えを述べていたのです。そして結果として家族の間に問題を起こし、兄が弟に殺意を覚えるようになったのです。こうして親の不一致というものが怒りを引き起こすことになりました。これも同じです。もし家族の中で親の間に不一致があればどうなるでしょう？父親がこうしているという方針に対して、例えば母親が従おうとしていないことを子どもが見れば、例えば母親がいない場面で父親が母親のことを悪く言ったり、陰口をたたいているような場面を目の当たりにすれば、その子どもはどうなるでしょう？当然その子どもは混乱を起こすでしょう。親の間に争いが存在していれば、それが彼らの心から、心から親に従いたいという意欲を奪ってしまうことにつながる危険性があるというわけです。

## c) 何もしないこと

そしてもう一つだけ見るなら、子どものうちに怒りを引き起こしてしまう三つ目の態度は「何もしないこと」です。たとえ子どもが罪を犯していたとしても、それをそのまま放置するような態度というのは、大きな怒りを子どもの内に引き起こすことになるのです。まさにダビデがそうでした。今は詳しくは見ませんが、彼の子どもひとりであったアムノンは妹のタマルに恋をして、そしてある時、力づくで彼女を辱めたことがありました。家族の間においてひどい罪が行われていたのです。この問題を父親であったダビデは耳にしました。では耳にしたダビデはいったいどんな行動をとったのでしょうか？その様子が次のように描かれていました。Ⅱサムエル記の13：21にこう書いていました。「**ダビデ王は、事の一部始終を聞いて激しく怒った。**」と。ある意味当然ですね。確かに父親のダビデは当然のように激しい怒りを覚えました。でも皆さん、それだけでした。罪を犯したアムノンを正しく戒めることさえしなかったのです。そしてその結果どうなりました？もちろんいろんな問題が立て続きに起こりました。でも何よりもダビデの子どもひとりであったタマルの兄アブシャロムは、そのアムノンをひどく憎んで、最後には彼を殺害することになるのです。同じⅡサムエル13：28にこう書いていました。「**アブシャロムは自分に仕える若い者たちに命じて言った。「よく注意して、アムノンが酔って上ぎげんになったとき、私が『アムノンを打て』と言ったら、彼を殺せ。恐れてはならない。この私が命じるのではない。強くあれ。力ある者となれ。』」**」と。こうして何もしないということは、怒りを引き起こすことになりました。これも同じです。もし子どもが罪や過ちを犯しているにもかかわらず、それをそのまま置いておくとうなるでしょう？その子どもは言うまでもなく、神様の前に喜ばれるようなことをすることよりも、自分勝手な歩みをするようになるでしょう。「それは、間違っている。」と愛をもって戒められなければ、忠実に仕えていくということを妥協するようになるでしょう。神様の前に正しいことを模範として親が示さないということは、彼らの心から熱意や喜びを奪うことに繋がってしまう危険性がある、というわけです。ですから三つ考えただけでも、確かに親には大きな責任がありました。子どもをおこらせるのではなくて、励まし、どんなときもその成長を助けていくという、そんな親としての責任を忠実に果たしているのでしょうか？「子どもをおこらせない」ということ、それが親に与えられた大切な務めでした。そしてそれが神様のご計画でもあったわけです。

さて、きょう私たちは、子どもの責任と親の責任をみことばから見ました。見てきて皆さん、夫婦のときもそうでしたが、このみことばに自分自身の心を照らし合わせるときに、親子関係というものは、私たちそれぞれのありのままの姿を表すものだと思います？私たちが親子関係を見るときに、まさに



そこに私や皆さんひとりひとりのうちに潜んでいる罪を明らかにし、また何よりも霊的な必要を示してくれるわけです。間違いなく言えるのは、不完全な私たちひとりひとりが神様の喜ばれる家庭生活を送っていきたく願うのであれば、私たちの力ではどうしてもそれをなすことはできない、その変化をなしてくださる十分なキリストとみことばに依り頼むことしかない、ということです。見てきたように、子どもの心を変えることができるのも神様でした。子どもの心と私たちの心が全然違うものではありません。私たち親の心さえも変えることができるのは、同じ神様の恵みの力でしかありませんでした。だからこそ私たちは神様に依り頼み続けて歩いていくことが必要になるのです。このように私たちがみことばを見たときに、これまでの歩みが神様の意図から外れているということにも気づくなら、素直にそれを認めて、悔い改めて、そして神様の助けを祈り求めながら歩いていくことです。私たちは完全ではありません。でも完全な、私たちを助けてくださるのに十分な恵みの力が、私たちには与えられています。そのことを頼り求めることができます。今も生きて働いてくださるその神様に、私たちはどんなときも希望をおいて歩むことができます。どんなに頑なな子どもの心だったとしても、先週も私たちが見たように、私たち自身の心の頑なさを知っていれば、私たちはいつも期待することができます。こんな私の心さえも変えてくださるその神様は、私の愛する子どもの心を変えてくださる。だからその神様に期待しながら、それぞれ与えられた務めを忠実に歩いていきましょう。